

# 山椒大夫

森鷗外

青空文庫



越後の春日を経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群れが歩いている。母は三十歳を  
 踰えたばかりの女で、二人の子供を連れている。姉は十四、弟は十二である。それに四十  
 ぐらいの女中が一人ついて、くたびれた同胞二人を、「もうじきにお宿にお着きなさい  
 ます」と言つて励まして歩かせようとする。二人の中で、姉嬢は足を引きずるようにして  
 歩いているが、それでも気が勝つていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折り折  
 り思い出したように弾力のある歩きつきをして見せる。近い道を物詣りにでも歩くのな  
 ら、ふさわしくも見えそうな一群れであるが、笠やら杖やかいかいがいしい出立ちをしてい  
 るのが、誰の目にも珍らしく、また気の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の断えたり続いたりする間を通つている。砂や小石は多いが、秋日和によ  
 く乾いて、しかも粘土がまじつてゐるために、よく固まつていて、海のそばのように踝を  
 埋めて人を悩ますことはない。

藁葺きの家が何軒も立ち並んだ一構えが柞の林に囲まれて、それに夕日がかつときして  
 いるところに通りかかった。

「まああの美しい紅葉をござらん」と、先に立つてゐた母が指さして子供に言った。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも言わぬので、女中が言った。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね」

姉娘が突然弟を顧みて言った。「早くお父うさまのいらっしやるところへ往きたいわね」  
「姉えさん。まだなかなか往かれはしないよ」弟は賢しげに答えた。

母が諭すように言った。「そうですね。今まで越して来たような山をたくさん越して、河や海をお船でたびたび渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出しておとなしく歩かなくては」

「でも早く往きたいのですもの」と、姉娘は言った。

一群れはしばらく黙って歩いた。

向うから空桶を担いで来る女がある。塩浜から帰る潮汲み女である。

それに女中が声をかけた。「もしもし。この辺に旅の宿をする家はありませんか」

潮汲み女は足を駐めて、主従四人の群れを見渡した。そしてこう言った。「まあ、お気の毒な。あいにくなところで日が暮れますね。この土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありません」

女中が言った。「それは本当ですか。どうしてそんなに人気が悪いのでしょうか」

二人の子供は、はずんで来る対話の調子を気にして、潮汲み女のそばへ寄つたので、女中と三人で女を取り巻いた形になつた。

潮汲み女は言つた。「いいえ。信者が多くて人気のいい土地ですが、くにのかみ 国守おきての掟おきてだからかたがありません。もうあそこに」と言いさして、女は今来た道を指さした。「もうあそこに見えていますますが、あの橋までおいでなさると高たか札ふだが立っています。それにくわしく書いてあるようですが、近ごろ悪い人買とがいがこの辺を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはお咎とがめがあります。あたり七軒巻添しほえになるそうです」

「それは困りますね。子供衆もおいでなさるし、もうそう遠くまでは行かれませんか。どうかしようはありますまいか」

「そうですね。わたしの通う塩浜のあるあたりまで、あなた方がおいでなさると、夜になつてしましましょう。どうもそこらでいい所を見つけて、野宿をなさるよりほか、しかたがありますまい。わたしの思案では、あそのこの橋の下にお休みなさるがいいでしょう。岸の石垣にびつたり寄せて、河原に大きい材木がたくさん立ててあります。荒川かみの上から流ながして来た材木です。昼間はその下で子供が遊んでいますますが、奥の方には日もささず、暗くなつている所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはこうして毎日通う塩浜の

持ち主のところにあります。ついその柞ははその森の中です。夜になったら、藁わらや薦こもを持って往つてあげましょう」

子供らの母は一人離れて立つて、この話を聞いていたが、このとき潮汲み女のそばに進み寄つて言った。「よい方に出逢であいましたのは、わたしどもの為しあわ合せでございます。そこへ往つて休みましょう。どうぞ藁や薦をお借り申しとうございます。せめて子供たちにも敷かせたりさせたりいたしとうございます」

潮汲み女は受け合つて、柞の林の方へ歸つて行く。主従四人は橋のある方へ急いだ。

荒川にかけ渡したおうげのはし応化橋たもとの袂たもとに一群れは来た。潮汲み女の言った通りに、新しい高札が立っている。書いてある国守の掟も、女の詞ことばにたがわない。

人買せんぎいが立ち廻るなら、その人買せんぎいの詮議せんぎをしたらよきそうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷わせるような掟を、国守はなぜ定めたものか。ふつつかな世話の焼きようである。しかし昔の人の目には掟である。子供らの母は

ただそういう掟のある土地に来合わせた運命を歎くだけで、掟の善悪は思わない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りるものの通う道がある。そこから一群れは河原に降りた。なるほど大層な材木が石垣に立てかけてある。一群れは石垣に沿うて材木の下へくぐつてはいった。男の子は面白がつて、先に立つて勇んではいった。

奥深くもぐつてはいると、洞穴ほらあなのようになった所がある。下には大きい材木が横になつているので、床を張つたようである。

男の子が先に立つて、横になつている材木の上に乗つて、一番隅すみへはいつて、「姉えさん、早くおいでなさい」と呼ぶ。

姉娘はおそろおそろ弟のそばへ往つた。

「まあ、お待ち遊ばせ」と女中が言つて、背に負つていた包みをおろした。そして着換えの衣類を出して、子供を脇わきへ寄らせて、隅のところに敷いた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、二人の子供が左右からすがりついた。岩代いわしろの信夫郡しのぶごおりの住家すみかを出て、親子はここまで来るうちに、家の中ではあつても、この材木の蔭より外らしい所に寝たことがある。不自由にも次第に慣れて、もうさほど苦にはしない。

女中の包みから出したのは衣類ばかりではない。用心に持っている食べ物もある。女中

はそれを親子の前に出して置いて言った。「ここでは焚火たきびをいたすことは出来ません。もし悪い人に見つけられてはならぬからでございませう。あの塩浜の持ち主とやらの家まで往つて、お湯をもらつてまいりませう。そして藁わらや薦こものことも頼んでまいりませう」

女中はまめまめしく出て行つた。子供は楽しげに おこしごめ やら、乾ほした果くだものやらを食べはじめた。

しばらくすると、この材木の蔭へ人のはいつて来る足音がした。「姥竹うばたけかい」と母親が声をかけた。しかし心のうちには、柞ははその森まで往つて来たにしては、あまり早いと疑つた。姥竹というのは女中の名である。

はいつて来たのは四十歳ばかりの男である。骨組みのたくましい、筋肉が一つひとつ肌の上から数えられるほど、脂肪の少ない人で、牙彫げぼりの人形のような顔に笑えみを湛たえて、手に数珠ずずを持つてゐる。我が家を歩くような、慣れた歩きつきをして、親子のひそんでゐるところへ進み寄つた。そして親子の座席ざせきにしている材木の端に腰をかけた。

親子はただ驚いて見ている。仇あたをしそうな様子も見えぬので、恐ろしいとも思わぬのである。

男はこんなことを言う。「わしは山岡大夫という船乗りじや。このごろこの土地を人買

いが立ち廻るといので、国守が旅人に宿を貸すことを差し止めた。人買いをつかまえることは、国守の手に合わぬと見える。気の毒なは旅人じゃ。そこでわしは旅人を救うてやろうと思ひ立つた。さいわいわしが家は街道かいどうを離れているので、こつそり人を留めても、誰に遠慮もいらぬ。わしは人の野宿をしそうな森の中や橋の下を尋ね廻つて、これまで大勢の人を連れて帰つた。見れば子供衆が菓子食べていなさるが、そんな物は腹の足しにはならないで、齒に障さわる。わしがところではさしたる饗もてなし応はせぬが、芋粥いもがゆでも進ぜましよう。どうぞ遠慮せずに来て下されい」男は強しいて誘うでもなく、独ひとりごと語ことのように言つたのである。

子供の母はつくづく聞いていたが、世間の掟にそむいてまでも人を救おうというありがたい志に感ぜずにはいられなかつた。そこでこう言つた。「承われば殊勝なお心がけと存じます。貸すなという掟のある宿を借りて、ひよつと宿やどぬし主ぬしに難儀をかけようかと、それが気がかりでございますが、わたくしはともかくも、子供らに温ぬくいお粥かゆでも食べさせて、屋根の下に休ませることが出来ましたら、そのご恩はのちの世までも忘れずまい」

山岡大夫はうなずいた。「さてさてよう物のわかるご婦人じゃ。そんならすぐに案内をして進ぜましよう」こう言つて立ちそうにした。

母親は気の毒そうに言った。「どうぞ少しお待ち下さいませ。わたくしども三人がお世話になるさえ心苦しゅうございますのに、こんなことを申すのはいかがと存じますが、実は今一人連れがごいます」

山岡大夫は耳をそばだてた。「連れがおりなきる。それは男か女子か」

「子供たちの世話をさせに連れて出た女中でございます。湯をもらうと申して、街道を三四町あとへ引き返してまいりました。もうほどなく帰ってまいりましょう」

「お女中かな。そんなら待つて進ぜましよう」山岡大夫の落ち着いた、底の知れぬような顔に、なぜか喜びの影が見えた。

ここは直江の浦である。日はまだ米山よねやまの背後うしろに隠れていて、紺青こんじょうのような海の上には薄い靄もやがかかっている。

一群れの客を舟に載せて纜ともづなを解いている船頭がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家に泊った主従四人の旅人である。

応化橋おうげのはしの下で山岡大夫に出逢った母親と子供二人とは、女中姥竹うばたけが欠け損じた瓶子へいしに湯をもらって帰るのを待ち受けて、大夫に連れられて宿を借りに往った。姥竹は不安らしい顔をしながらついて行つた。大夫は街道を南へはいつた松林の中の草やの家に四人を留めて、芋粥いもがゆをすすめた。そしてどこからどこへ往く旅かと問うた。くたびれた子供らをさきへ寝させて、母は宿の主人あるじに身の上のおおよそを、かすかな燈火ともしびのもとで話した。自分は岩代いわしろのものである。夫が筑紫へ往つて帰らぬので、二人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉娘の生まれたときから守りもをしてくれた女中で、身寄りのないものゆえ、遠い、覚束ない旅の伴ともをすることになつたと話したのである。

さてここまでは来たが、筑紫の果てへ往くことを思えば、まだ家を出たばかりと言つてよい。これから陸おかを行つたものであろうか。または船路ふなぢを行つたものであろうか。主人あるじは船乗りであつてみれば、定めて遠国のことを知つてゐるだろう。どうぞ教えてもらいたいと、子供らの母が頼んだ。

大夫は知れきつたことを問われたように、少しもためらわずに船路を行くことを勧めた。陸を行けば、じき隣の越中の国に入る界さかいにさえ、親不知子不知おやしらすこしらすの難所がある。削り立てたような巖石の裾すそには荒浪あらなみが打ち寄せる。旅人は横穴にはいつて、波の引くのを待つてい

て、狭い巖石の下の道を走り抜ける。そのときは親は子を顧みることが出来ず、子も親を顧みることが出来ない。それは海辺うみべの難所である。また山を越えると、踏まえた石が一つ揺げば、千尋ちひろの谷底に落ちるような、あぶない岨そわみち道もある。西国へ行くまでには、どれほどの難所があるか知れない。それとは違って、船路は安全なものである。たしかな船頭にさえ頼めば、いながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西国まで行くことは出来ぬが、諸国の船頭を知っているから、船に載せて出て、西国へ行く舟に乗り換えさせることが出来る。あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事もなげに言った。

夜が明けかかると、大夫は主従四人をせき立てて家を出た。そのとき子供らの母は小さい囊ふくろから金を出して、宿賃を払おうとした。大夫は留めて、宿賃はもらわぬ、しかし金を入れてある大切な囊は預かっておこうと言った。なんでも大切な品は、宿に着けば宿の主人あに、舟に乗れば舟の主に預けるものだというのである。

子供らの母は最初に宿を借ることを許してから、主人の大夫の言うことを聴かなくてはならぬような勢いになった。掟を破つてまで宿を貸してくれたのを、ありがたくは思っても、何事によらず言うがままになるほど、大夫を信じてはいない。こういう勢いになったのは、大夫の詞に人を押しつける強みがあつて、母親はそれに抗あらがうことが出来ぬからであ

る。その抗うことの出来ぬのは、どこか恐ろしいところがあるからである。しかし母親は自分が大夫を恐れているとは思っていない。自分の心がはつきりわかっている。

母親は余儀ないことをするような心持ちで舟に乗った。子供らは夙いだ海の、青い氈を敷いたような面を見て、物珍しさに胸をおどらせて乗った。ただ姥竹が顔には、きのう橋の下を立ち去ったときから、今舟に乗るときまで、不安の色が消え失せなかった。

山岡大夫は纜を解いた。で岸を一押し押すと、舟は揺めきつつ浮び出た。

山岡大夫はしばらく岸に沿うて南へ、越中境の方角へ漕いで行く。靄は見る見る消えて、波が日にかがやく。

人家のない岩蔭に、波が砂を洗って、海松や荒布を打ち上げているところがあつた。そこに舟が二艘止まっている。船頭が大夫を見て呼びかけた。

「どうじゃ。あるか」

大夫は右の手を挙げて、大拇を折って見せた。そして自分もそこへ舟を舫った。大拇

だけ折つたのは、四人あるという相図あいずである。

前からいた船頭の一人は宮崎の三郎といつて、越中宮崎のものである。左の手の拳こぶしを開いて見せた。右の手が貨しろものの相図になるように、左の手は銭の相図になる。これは五貫文につけたのである。

「気張るぞ」と今一人の船頭が言つて、左の臂ひじをつと伸べて、一度拳を開いて見せ、ついで示指ひとさしゆびを豎たてて見せた。この男は佐渡の二郎で六貫文につけたのである。

「横着者おうちやくもの奴」と宮崎が叫んで立ちかかれれば、「出し抜こうとしたのはおぬしじゃ」と佐渡が身構えをする。二艘の舟がかしいで、舷ふなはたが水むちうを答こたつた。

大夫は二人の船頭の顔を冷ややかに見較べた。「あわてるな。どっちも空手からてでは還かえさぬ。お客さまがご窮屈きゆうくつでないように、お二人ずつ分けて進ぜる。賃銭はあとでつけた値段の割じゃ」こう言つておいて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人ずつあの舟へお乗りなされ。どれも西国への便船じゃ。舟足というものは、重過ぎては走りが悪い」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手をとつて乗り移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾いくさし縵まかの銭を握らせたのである。

「あの、主人あるじにお預けなされた囊ふくろは」と、姥竹が主しゆうの袖そでを引くとき、山岡大夫は空舟をつ

と押し出した。

「わしはこれでお暇いとまをする。たしかな手からたしかな手へ渡すまでがわしの役じゃ。ご機嫌きげんようお越しなされ」

ろの音が忙せわしく響いて、山岡大夫の舟は見る見る遠ざかって行く。

母親は佐渡に言った。「同じ道を漕いで行つて、同じ港に着くのでございませうね」

佐渡と宮崎とは顔を見合せて、声を立てて笑つた。そして佐渡が言った。「乗る舟は弘誓くわいの舟、着くは同じ彼岸かのきしと、蓮華峰寺れんげふじの和尚おしょうが言うたげな」

二人の船頭はそれきり黙つて舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」と呼びかわす親子主従は、ただ遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂おしげに舷ふなばたに手をかけて伸び上がった。「もうしかたがない。これが別れだよ。安寿あんじゆは守本尊の地藏様を大切におし。厨子王ずしおうはお父うさまの下さつた護り刀を大切におし。どうぞ二人が離れぬように」安寿は姉娘、厨子王は弟の名である。

子供はただ「お母あさま、お母あさま」と呼ぶばかりである。

舟と舟とは次第に遠ざかる。後ろには餌えを待つ雛ひなのように、二人の子供があいた口が見えていて、もう声は聞えない。

姥竹は佐渡の二郎に「もし船頭さん、もしもし」と声をかけていたが、佐渡は構わぬので、とうとう赤松の幹のような脚にすがつた。「船頭さん。これはどうしたことでございます。あのお嬢さま、若さまに別れて、生きてどこへ往かれましよう。奥さまも同じことでございます。これから何をたよりにお暮らしなさいましよう。どうぞあの舟の往く方へ漕いで行つて下さいまし。後生でございます」

「うるさい」と佐渡は後ろざまに蹴つた。姥竹は舟ふなとこに倒れた。髪は乱れて舷にかかった。

姥竹は身を起した。「ええ。これまでじゃ。奥さま、ご免下さいまし」こう言つてまっさかさまに海に飛び込んだ。

「こら」と言つて船頭は臂ひじを差し伸ばしたが、まにあわなかつた。

母親は袿うちぎを脱いで佐渡が前へ出した。「これは粗末な物でございますが、お世話になつたお礼に差し上げます。わたくしはもうこれでお暇を申します」こう言つて舷に手をかけた。

「たわけが」と、佐渡は髪をつかんで引き倒した。「うぬまで死なせてなるものか。大事なしろものな貨しらじゃ」

佐渡の二郎は牽つなを引き出して、母親をくるくる巻きにして転がした。そして北へ北へと漕いで行った。

「お母あさまお母あさま」と呼び続けている姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走つて行く。「もう呼ぶな」と宮崎が叱つた。「水の底の鱗いりくず介には聞えても、あの女子おなごには聞えぬ。女子どもは佐渡へ渡つて粟あわの鳥でも逐おわせられることじやろう」

姉の安寿と弟の厨子王とは抱き合つて泣いている。故郷を離れるも、遠い旅をするも母と一しよにすることだと思つていたのに、今はからずも引き分けられて、二人はどうしていいかわからない。ただ悲しさばかりが胸にあふれて、この別れが自分たちの身の上をどれだけ変らせるか、そのほどさえ弁わえられぬのである。

午ひるになつて宮崎は餅もちを出して食つた。そして安寿と厨子王にも一つずつくれた。二人は餅を手を持って食べようともせず、目を見合せて泣いた。夜は宮崎がかぶせた苦とまの下で、泣きながら寝入つた。

こうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。宮崎は越中、能登、越前、若狭の津々浦々を売り歩いたのである。

しかし二人がおさないので、体もか弱く見えるので、なかなか買おうと言うものがない。たまに買い手があつても、値段の相談が調わらない。宮崎は次第に機嫌を損じて、「いつまでも泣くか」と二人を打つようになった。

宮崎が舟は廻り廻つて、丹後の由良の港に來た。ここには石浦というところに大きい邸を構えて、田畑に米麦を植えさせ、山では狛をさせ、海では漁をさせ、蚕飼をさせ、織をさせ、金物、陶物、木の器、何から何まで、それぞれの職人を使って造らせる山椒大夫という分限者がいて、人なら幾らでも買う。宮崎はこれまでも、よそに買い手のない貨があると、山椒大夫がところへ持つて來ることになつていた。

港に出張つていた大夫の奴頭は、安寿、厨子王をすぐに七貫文に買った。

「やれやれ、餓鬼どもを片づけて身が軽うなつた」と言つて、宮崎の三郎は受け取つた錢を懐に入れた。そして波止場の酒店にはいった。

一抱えに余る柱を立て並べて造つた大<sup>おお</sup>廈<sup>いへ</sup>の奥深い広間に一間四方の炉を切らせて、炭火がおこしてある。その向うに茵<sup>しとね</sup>を三枚重ねて敷いて、山椒大夫は几<sup>おしまずき</sup>にもたれている。左右には二郎、三郎の二人の息子が狢<sup>こまいぬ</sup>犬のように列<sup>なら</sup>んでいる。もと大夫には三人の男子があつたが、太郎は十六歳のとき、逃亡を企てて捕えられた奴<sup>やつこ</sup>に、父が手ずから烙<sup>やきいん</sup>印をするのをじつと見ていて、一言も物を言わずに、ふいと家を出て行くえが知れなくなった。今から十九年前のことである。

奴<sup>やつこ</sup>頭<sup>がしら</sup>が安寿、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の子供に辞儀をせいと言つた。

二人の子供は奴頭の詞<sup>ことば</sup>が耳に入らぬらしく、ただ目をみはつて大夫を見ている。今年六十歳になる大夫の、朱を塗つたような顔は、額<sup>あご</sup>が広く、髪も鬚<sup>ひげ</sup>も銀色に光っている。子供らは恐ろしいよりは不思議がつて、じつとその顔を見ているのである。

大夫は言つた。「買うて来た子供はそれか。いつも買う奴<sup>やつこ</sup>と違うて、何に使うてよいかわからぬ、珍らしい子供じやというから、わざわざ連れて来させてみれば、色の蒼<sup>あお</sup>ざめた、か細い童<sup>わらわ</sup>どもじや。何に使うてよいかは、わしにもわからぬ」

そばから三郎が口を出した。末の弟ではあるが、もう三十になっている。「いやお父つ

さん。さつきから見ているれば、辞儀をせいと言われても辞儀もせぬ。ほかの奴のように名のりもせぬ。弱々しゆう見えてもしぶとい者どもじゃ。奉公初めは男が柴苳り、女が汐汲みときまつている。その通りにさせなされい」

「おつしやるとおり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭が言った。

大夫は嘲笑あざわらった。「愚か者と見える。名はわしがつけてやる。姉はいたつきを垣しのぶぐ衣さ、弟は我が名を萱草わすれぐさじゃ。垣衣は浜へ往つて、日に三荷の潮を汲め。萱草は山へ往つて日に三荷の柴を刈れ。弱々しい体に免じて、荷は軽うして取らせる」

三郎が言った。「過分のいたわりようじゃ。こりや、奴頭。早く連れて下がって道具を渡してやれ」

奴頭は二人の子供を新参小屋に連れて往つて、安寿には桶おけと杓ひさぎ、厨子王には籠かごと鎌かまを渡した。どちらにも午餉ひるげを入れる標かたいけ子けが添えてある。新参小屋はほかの奴婢ぬひの居所とは別になつているのである。

奴頭が出て行くころには、もうあたりが暗くなつた。この屋いえには燈火あかりもない。

翌日の朝はひどく寒かった。ゆうべは小屋に備えてある衾ふすまがあまりきたないので、厨子くしが薦こもを探して来て、舟で苦とまをかずいたように、二人でかずいて寝たのである。

きのう奴頭に教えられたように、厨子王は櫛か子いけを持って厨くりへか餉いを受け取りに往った。屋根の上、地にちらばった藁の上には霜が降っている。厨は大きい土間で、もう大勢の奴婢ひが来て待っている。男と女とは受け取る場所が違うのに、厨子王は姉のと自分のともらおうとするので、一度は叱られたが、あすからはめいめいがもらいに来ると誓って、ようよう櫛か子いけのほかに、面めん桶づつに入れたかたかゆと、木の椀まりに入れた湯との二人前をも受け取った。は塩を入れて炊かしいである。

姉と弟とは朝餉あさげを食べながら、もうこうした身の上になつては、運命のもとに項うなじを屈かがめるよりほかはないと、けなげにも相談した。そして姉は浜辺へ、弟は山路をさして行くのである。大夫が邸の三の木戸、二の木戸、一の木戸を一しよに出て、二人は霜を履ふんで、見返りがちに左右へ別れた。

厨子王が登る山は由良ゆらが嶽たけの裾すそで、石浦からは少し南へ行つて登るのである。柴を茹る所は、麓ふもとから遠くはない。ところどころ紫色の岩の露あわられている所を通つて、やや広い平

地に出る。そこに雑木が茂っているのである。

厨子王は雑木林の中に立つてあたりを見廻した。しかし柴はどうして苅るものかと、しばらくは手を着けかねて、朝日に霜の融けかかる、茵しとねのような落ち葉の上に、ぼんやりすわつて時を過した。ようよう気を取り直して、一枝二枝苅るうちに、厨子王は指を傷めた。そこでまた落ち葉の上にすわつて、山でさえこんな寒い、浜辺に行つた姉さまは、さぞ潮風が寒かろうと、ひとり涙をこぼしていた。

日がよほど昇つてから、柴を背負つて麓へ降りる、ほかの樵きこりが通りかかつて、「お前も大夫のところの奴か、柴は日に何苅るのか」と問うた。

「日に三苅苅るはずの柴を、まだ少しも苅りませぬ」と厨子王は正直に言った。

「日に三苅の柴ならば、午ひるまでに二苅苅るがいい。柴はこうして苅るものじゃ」樵は我が荷をおろして置いて、すぐに一苅苅つてくれた。

厨子王は気を取り直して、ようよう午までに一苅苅り、午からまた一苅苅った。

浜辺に往く姉の安寿は、川の岸を北へ行つた。さて潮を汲む場所に降り立つたが、これも汐の汲みようを知らない。心で心を励まして、ようよう杓ひさいしをおろすや否や、波が杓を取つて行つた。

隣で汲んでいる女子が、手早く杓を拾って戻した。そしてこう言った。「汐はそれでは汲まれません。どれ汲みようを教えて上げよう。右手の杓でこう汲んで、左手の桶でこう受ける」とうとう一荷汲んでくれた。

「ありがとうございます。汲みようが、あなたのお蔭で、わかったようでございます。自分で少し汲んでみましょう」安寿は汐を汲み覚えた。

隣で汲んでいる女子に、無邪気な安寿が気に入った。二人は午餉を食べながら、身の上を打ち明けて、姉妹の誓いをした。これは伊勢の小萩と云って、二見が浦から買われて来た女子である。

最初の日はこんな工合に、姉が言いつけられた三荷の潮も、弟が言いつけられた三荷の柴も、一荷ずつの勧進を受けて、日の暮れまでに首尾よく調った。

姉は潮を汲み、弟は柴を茹つて、一日一日と暮らして行つた。姉は浜で弟を思い、弟は山で姉を思い、日の暮れを待つて小屋に帰れば、二人は手を取り合つて、筑紫にいる父が

恋しい、佐渡にいる母が恋しいと、言つては泣き、泣いては言う。

とかくするうちに十日立つた。そして新参小屋を明けなくてはならぬときが来た。小屋を明ければ、奴は奴、婢は婢の組に入るのである。

二人は死んでも別れぬと言つた。奴頭が大夫に訴えた。

大夫は言つた。「たわけた話じや。奴は奴の組へ引きずつて往け。婢は婢の組へ引きずつて往け」

奴頭が承つて起とうとしたとき、二郎がかたわらから呼び止めた。そして父に言つた。

「おつしやる通りに童どもを引き分けさせてもよろしゅうございますが、童どもは死んでも別れぬと申すそうでございます。愚かなものゆえ、死ぬるかも知れませんが、苅る柴はわずかでも、汲む潮はいささかでも、人手を耗らすのは損でございます。わたくしがいいように計らつてやりましょう」

「それもそうか。損になることはわしも嫌いじゃ。どうにでも勝手にしておけ」大夫はこう言つて脇へ向いた。

二郎は三の木戸に小屋を掛けさせて、姉と弟とを一しよに置いた。

ある日の暮れに二人の子供は、いつものように父母のことを言つていた。それを二郎が

通りかかつて聞いた。二郎は邸を見廻つて、強い奴が弱い奴をしえた虐げたり、諍いさかいをしたり、盗みをしたりするのを取り締まっているのである。

二郎は小屋にはいつて二人に言った。「父母は恋しゆうても佐渡は遠い。筑紫はそれよりまた遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢いたいなら、大きゆうなる日を待つがよい」こう言つて出て行つた。

ほど経てまたある日の暮れに、二人の子供は父母のことを言つていた。それを今度は三郎が通りかかつて聞いた。三郎は寝鳥を取ることが好きで邸のうちの木立ち木立ちを、手に弓矢を持つて見廻るのである。

二人は父母のことを言うたびに、どうしようか、どうしようかと、逢いたさのあまりに、あらゆる手立てを話し合つて、夢のような相談をもする。きようは姉がこう言つた。「大きくなつてからでなくては、遠い旅が出来ないというのは、それは当り前のことよ。わたしたちはその出来ないことがしたいのだわ。だがわたしよく思つてみると、どうしても二人一しよにここを逃げ出しては駄目なの。わたしには構わないで、お前一人で逃げなくては。そしてさきへ筑紫の方へ往つて、お父うさまにお目にかかつて、どうしたらいいか伺うのだね。それから佐渡へお母さまのお迎えに往くがいいわ」三郎が立聞きしたのは、

あいにくこの安寿の詞であつた。

三郎は弓矢を持って、つと小屋のうちにはいった。

「こら。お主たちは逃げる談合をしておるな。逃亡の企てをしたものには烙印をする。それがこの邸の掟じや。赤うなつた鉄は熱いぞよ。」

二人の子供は真つ蒼になつた。安寿は三郎が前に進み出て言つた。「あれは嘘でございます。弟が一人で逃げたつて、まあ、どこまで往かれましよう。あまり親に逢いたいのので、あんなことを申しました。こないだも弟と一しよに、鳥になつて飛んで往こうと申ししたこともございます。出放題でございます」

厨子王は言つた。「姉えさんの言う通りです。いつでも二人で今のような、出来ないことばかし言つて、父母の恋しいのを紛らしているのです」

三郎は二人の顔を見較べて、しばらくの間黙つていた。「ふん。嘘なら嘘でもいい。お主たちが一しよにおつて、なんの話をすると、おれがたしかに聞いておいたぞ」  
こう言つて三郎は出て行つた。

その晩は二人が気味悪く思いながら寝た。それからどれだけ寝たかわからない。二人はふと物音を聞きつけて目をさました。今の小屋に来てからは、燈火を置くことが許され

ている。そのかすかな明りで見れば、枕もとに三郎が立っている。三郎は、つと寄つて、  
 両手で二人の手をつかまえる。そして引き立てて戸口を出る。蒼ざめた月を仰ぎながら、  
 二人は目見えのときに通つた、広い馬道めどうを引かれて行く。階はしを三段登る。廊ほそどのを通る。廻り  
 廻つてさきの日に見た広間にはいる。そこには大勢の人が黙つて並んでいる。三郎は二人  
 を炭火の真つ赤におこつた炉の前まで引きずつて出る。二人は小屋で引き立てられたとき  
 から、ただ「ご免なさいご免なさい」と言つていたが、三郎は黙つて引きずつて行くので、  
 しまいには二人も黙つてしまった。炉の向い側には茵しとね三枚を畳かさねて敷いて、山椒大夫がす  
 わつてゐる。大夫の赤顔が、座の右左に焚たいてある炬たてあかし火を照り反して、燃えるよう  
 ある。三郎は炭火の中から、赤く焼けている火ひばしを抜き出す。それを手に持つて、しばらく  
 く見てゐる。初め透き通るように赤くなつていた鉄が、次第に黒ずんで来る。そこで三郎  
 は安寿を引き寄せて、火を顔に当てようとする。厨子王はその肘ひじにからみつく。三郎は  
 それを蹴倒けたおして右の膝ひざに敷く。とうとう火を安寿の額に十文字に当てる。安寿の悲鳴が  
 一座の沈黙を破つて響き渡る。三郎は安寿を衝き放して、膝の下の厨子王を引き起し、そ  
 の額にも火を十文字に当てる。新たに響く厨子王の泣き声が、ややかすかになつた姉の  
 声に交じる。三郎は火を棄てて、初め二人をこの広間へ連れて来たときのように、また

二人の手をつかまえる。そして一座を見渡したのち、広い母屋おもやを廻つて、二人を三段の階はしの所まで引き出し、凍こおった土の上に衝き落す。二人の子供は創きずの痛みと心の恐れとに氣を失いそうになるのを、ようよう堪え忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家こやに帰る。臥所ふしどの上に倒れた二人は、しばらく死骸しがいのように動かずになっていたが、たちまち厨子王が「姉えさん、早くお地藏様を」と叫んだ。安寿はすぐに起き直つて、肌はだの守まもり袋ぶくろを取り出した。わななく手に紐ひもを解いて、袋から出した仏像を枕もとに据すえた。二人は右左にぬかずいた。そのとき齒をくいしばつてもこらえられぬ額の痛みが、搔き消すように失なせた。掌てのひらで額を撫なでてみれば、創は痕もなくなった。はつと思つて、二人は目をさました。二人の子供は起き直つて夢の話をした。同じ夢を同じときに見たのである。安寿は守本尊を取り出して、夢で据えたと同じように、枕もとに据えた。二人はそれを伏し拝んで、かすかな燈とも火しびの明りにすかして、地藏尊の額を見た。白びやく毫ごうの右左に、鑿たがねで彫たつたような十文字の疵きずがあざやかに見えた。

二人の子供が話を三郎に立聞きせられて、その晩恐ろしい夢を見たときから、安寿の様子がひどく變つて来た。顔には引き締まったような表情があつて、眉まゆの根には皺しわが寄り、目ははるかに遠いところを見つめている。そして物を言わない。日の暮れに浜から帰ると、これまでは弟の山から帰るのを待ち受けて、長い話をしたのに、今はこんなときにも詞ことば少すくなにしている。厨子王が心配して、「姉えさんどうしたのです」と言うと「どうもしないの、大丈夫よ」と言つて、わざとらしく笑う。

安寿の前と變つたのはただこれだけで、言うことが間違つてもおらず、することも平へいぜ生の通りである。しかし厨子王は互いに慰めもし、慰められもした一人の姉が、變つた様子をするのを見て、際限なくつらく思う心を、誰に打ち明けて話すことも出来ない。二人の子供の境きようがい界は、前より一層寂しくなつたのである。雪が降つたり歇やんだりして、年が暮れかかった。奴やつも婢はしためも外に出る為事しごとを止めて、家中で働くことになつた。安寿は糸を紡つむぐ。厨子王は藁わらを擣うつ。藁わらを擣うつのは修行はいらぬが、糸を紡ぐのはむずかしい。それを夜になると伊勢の小萩が来て、手伝つたり教えたりする。安寿は弟に対する様子が變つたばかりでなく、小萩に対しても詞少ことばなになつて、やもすると不愛想をする。しかし小萩は機嫌を損せず、いたわるようにしてつきあつて

いる。

山椒大夫が邸の木戸にも松が立てられた。しかしこの年のはじめは何の晴れがましいこともなく、また族の女子たちは奥深く住んでいて、出入りすることがまれなので、賑わしいこともない。ただ上も下も酒を飲んで、奴の小屋には諍いが起るだけである。常は諍いをする、きびしく罰せられるのに、こういうときは奴頭が大目に見る。血を流しても知らぬ顔をしていることがある。どうかすると、殺されたものがあっても構わぬのである。寂しい三の木戸の小屋へは、折り折り小萩が遊びに来た。婢の小屋の賑わしさを持って来たかと思うように、小萩が話している間は、陰気な小屋も春めいて、このごろ様子の変っている安寿の顔にさえ、めつたに見えぬ微笑みの影が浮ぶ。

三日立つと、また家の中の為事が始まった。安寿は糸を紡ぐ。厨子王は藁を擣つ。もう夜になって小萩が来ても、手伝うにおよばぬほど、安寿は紡錘を廻すことに慣れた。様子は変っていても、こんな静かな、同じことを繰り返すような為事をするには差支えなく、また為事がかえって一向きになつた心を散らし、落ち着きを与えるらしく見えた。姉と前のように話をするこの出来ぬ厨子王は、紡いでいる姉に、小萩がいて物を言ってくれぬのが、何よりも心強く思われた。

水が温<sup>ぬ</sup>み、草が萌<sup>も</sup>えるころになった。あすからは外の為事が始まるという日に、二郎が邸を見廻るついでに、三の木戸の小屋に来た。「どうじやな。あす為事に出られるかな。大勢の人のうちには病気でおるものもある。奴頭の話聞いたばかりではわからぬから、きようは小屋小屋を皆見て廻ったのじや」

藁を擣っていた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、このごろの様子にも似ず、安寿が糸を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。「それについてお願いがございます。わたくしは弟と同じ所で為事がいたしとうございます。どうか一しよに山へやって下さるようにな、お取り計らいなすつて下さいまし」蒼ざめた顔に紅<sup>くれない</sup>がさして、目がかがやいている。

厨子王は姉の様子が二度目に変つたらしく見えるのに驚き、また自分になんの相談もせずについて、突然柴蒔りに往きたいと言うのをも訝<sup>いぶか</sup>しがって、ただ目をみはって姉をまもっている。

二郎は物を言わずに、安寿の様子をじつと見ている。安寿は「ほかにない、ただ一つのお願いでございます、どうぞ山へおやりなすつて」と繰り返して言っている。

しばらくして二郎は口を開いた「この邸では奴婢ぬひのなにかしになんの為事をさせるということは、重いことにしてあつて、父がみずからきめる。しかし垣しのぶぐさ衣、お前の願いはよくよく思い込んでのことと見える。わしが受け合つて取りなして、きつと山へ往かれるようにしてやる。安心しているがいい。まあ、二人のおさないものが無事に冬を過してよかつた」こう言つて小屋を出た。

厨子王は杵きねを置いて姉のそばに寄つた。「姉えさん。どうしたのです。それはあなたが一しよに山へ来て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出し抜けに頼んだのです。なぜわたしに相談しません」

姉の顔は喜びにかがやいている。「ほんにそうお思ひのはもつともだが、わたしだつてあの人の顔を見るまで、頼もうとは思つていなかったの。ふいと思いついたのだもの」「そうですか。変ですなあ」厨子王は珍らしい物を見るように姉の顔を眺めている。

奴頭が籠と鎌とを持つてはいつて来た。「垣しのぶぐさ衣さん。お前に汐汲みをよきせて、柴を茹りにやるのだそうで、わしは道具を持つて来た。代りに桶と杓ひきをもらつて往こう」

「これはどうもお手数てかずでございました」安寿は身軽に立って、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取ったが、まだ帰りそうにはしない。顔には一種の苦笑にがわらいのような表情が現われている。この男は山椒大夫一家いっけのものと言いつけを、神の託宣を聴くように聴く。そこで随分情けない、苛酷かしくなことをもためらわずにする。しかし生しょうとく得、人の悶もたえ苦しんだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事がおだやかに運んで、そんなことを見ずに済めば、その方が勝手である。今の苦笑いのような表情は人に難儀をかけずには済まぬとあきらめて、何か言ったり、したりするとき、この男の顔に現われるのである。

奴頭は安寿に向いて言った。「さて今一つ用事があるて。実はお前さんを柴蒞りにやることは、二郎様が大夫様に申し上げて拵こしらえなされたのじゃ。するとその座に三郎様がおられて、そんなら垣衣を大童おおわらわにして山へやれとおっしゃった。大夫様は、よい思いつきじゃとお笑いなされた。そこでわしはお前さんの髪をもうて往かねばならぬ」

そばで聞いている厨子王は、この詞を胸を刺されるような思いをして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安寿の顔からは喜びの色が消えなかった。「ほんにそうじゃ。柴蒞りに往くか

らは、わたしも男じや。どうぞこの鎌で切つて下さいまし」安寿は奴頭の前に項を伸ばした。

光沢のある、長い安寿の髪が、鋭い鎌の一搔きにさつくり切れた。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負い腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫のところに来てから、二人一しよに歩くのはこれがはじめである。

厨子王は姉の心を忖りかねて、寂しいような、悲しいような思いに胸が一ぱいになっている。きのうも奴頭の帰つたあとで、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとり何事かを考えているらしく、それをあからさまには打ち明けずにした。

山の麓に来たとき、厨子王はこらえかねて言った。「姉えさん。わたしはこうして久しぶりで一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはこうして手を引いていながら、あなたの方へ向いて、その禿かぶろになったお頭つむりを見ることが出来ません。姉えさん。あなたはわたしに隠して、何か考えていますね。

なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです」

安寿はけさも毫ごうこう光のさすような喜びを額にたたえて、大きい目をかがやかしている。しかし弟の詞には答えない。ただ引き合っている手に力を入れただけである。

山に登ろうとする所に沼がある。汀みぎわには去年見たときのように、枯れ葦あしが縦横に乱れているが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔ほとりから右に折れて登ると、そこに岩の隙間すきまから清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つつ、うねつた道を登つて行くのである。

ちようど岩の面おもてに朝日が一面にさしている。安寿は畳かきなり合つた岩の、風化した間に根をおろして、小さい莖すみれの咲いているのを見つけた。そしてそれを指さして厨子王に見せて言つた。「ごらん。もう春になるのね」

厨子王は黙つてうなずいた。姉は胸に秘密たぐわを蓄え、弟は憂えばかりを抱いているので、とかく受け応えが出来ずに、話は水が砂に沁しみ込むようにとぎれてしまう。

去年柴を茹つた木立ちのほとりに来たので、厨子王は足を駐とどめた。「ねえさん。ここらで茹るのです」

「まあ、もつと高い所へ登つてみましょうね」安寿は先に立つてずんずん登つて行く。厨

子王は訝いぶかりながらついて行く。しばらくして雑木林よりはよほど高い、外山とやまの頂とも言ふべき所に来た。

安寿はそこに立つて、南の方をじつと見ている。目は、石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流をたどつて、一里ばかり隔つた川向いに、こんもりと茂つた木立ちの中から、塔の尖さきの見える中山に止まつた。そして「厨子王や」と弟を呼びかけた。「わたしが久しい前から考えごとをしていて、お前ともいつものように話をしないのを、変だと思つていたのでしようね。もうきようは柴なんぞは苳ららなくてもいいから、わたしの言うことをよくお聞き。小萩は伊勢から売られて来たので、故郷からこの土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ行くのはむずかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすいことではないけれど、都へはきつと往かれませぬ。お母あさまとご一しよに岩代を出てから、わたしどもは恐ろしい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、よい人に出逢わぬにも限りませぬ。お前はこれから思いきつて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登つておくれ。神かみ 仏ほとけのお導きで、よい人さえ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父うさまのお身の上も知れよう。佐渡へお母あさまのお迎えに往くことも出来よう。籠や鎌は棄てておいて、標かた 子いけだけ持つて往くのだ

よ」

厨子王は黙つて聞いていたが、涙が頬ほおを伝つて流れて来た。「そして、姉えさん、あなたはどうぞしようというのです」

「わたしのことは構わないで、お前一人ですることを、わたしと一しよにするつもりでしておくれ。お父うさまにもお目にかかり、お母あさまをも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに来ておくれ」

「でもわたしがいなくなったら、あなたをひどい目に逢わせましょう」厨子王が心には烙や印きいんをせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それはいじめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買った婢はしためをあの人たちは殺しはしません。多分お前がいなくなったら、わたしを二人前働かせようとするでしょう。お前の教えてくれた木立ちの所で、わたしは柴をたくさん茹ります。六荷までは茹れないでも、四荷でも五荷でも茹りましょう。さあ、あそこまで降りて行って、籠や鎌をあそこに置いて、お前を籠へ送つて上げよう」こう言つて安寿は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思い定めかねて、ぼんやりしてついて降りる。姉は今年十五になり、弟は十三になっているが、女は早くおとなびて、その上物に憑つかれたように、聡さとく賢さかしく

なっているので、厨子王は姉の詞にそむくことが出来ぬのである。

木立ちの所まで降りて、二人は籠と鎌とを落ち葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、こんど逢うまでお前に預けます。

この地藏様をわたしだと思つて、護り刀と一しよにして、大事に持つていておくれ」

「でも姉えさんにお守がなくては」

「いいえ。わたしよりはあぶない目に逢うお前にお守を預けます。晩にお前が帰らないと、きつと討手うってがかかります。お前がいくら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追いつかれるにきまっています。さつき見た川の上手かみてを和江わえという所まで往つて、首尾よく人に見つけられずに、向う河岸へ越してしまえば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えていたお寺にはいつて隠しておもらい。しばらくあそこに隠れていて、討手が帰つて来たあとで、寺を逃げておいで」

「でもお寺の坊さんが隠しておいてくれるでしょうか」

「さあ、それが運うんだめ験しだよ。開ける運なら坊さんがお前を隠してくれましょう」

「そうですね。姉えさんのきょうおつしやることは、まるで神様か仏様がおつしやるようです。わたしは考えをきめました。なんでも姉えさんのおつしやる通りにします」

「おう、よく聴いておくれだ。坊さんはよい人で、きつとお前を隠してくれませう」

「そうです。わたしにもそうらしく思われて来ました。逃げて都へも往かれます。お父うさまやお母あさまにも逢われます。姉えさんのお迎えにも来られます」厨子王の目が姉と同じようにかがやいて来た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くおいで」

二人は急いで山を降りた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持ちが、暗示のように弟に移つて行つたかと思われる。

泉の湧く所へ来た。姉は櫛か子いけに添えてある木の椀まりを出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出かを祝うお酒だよ」こう言つて一口飲んで弟にさした。

弟は椀まりを飲み干した。「そんなら姉えさん、ご機嫌よう。きつと人に見つからずに、中山まで参ります」

厨子王は十歩ばかり残つていた坂道を、一走りに駆け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安寿は泉の畔ほとりに立つて、並木の松に隠れてはまた現われる後ろ影を小さくなるまで見送つた。そして日はようやく午ひるに近づくの、山に登ろうともしない。幸いにきようはこの

方角の山で木を樵<sup>こ</sup>る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安寿を見とがめるものもなかつた。

のちに同胞<sup>はらから</sup>を捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端<sup>はた</sup>で、小さい藁<sup>わ</sup>履<sup>らぐつ</sup>を一足拾<sup>そく</sup>つた。それは安寿の履<sup>くつ</sup>であつた。

中山の国分寺<sup>こくぶんじ</sup>の三門に、松明<sup>たいまつ</sup>の火影が乱れて、大勢の人が籠<sup>こ</sup>み入つて来る。先に立つたのは、白柄<sup>しらつか</sup>の薙<sup>なぎ</sup>刀<sup>なた</sup>を手挾<sup>たはさ</sup>んだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大声に言つた。「これへ参つたのは、石浦の山椒大夫が族<sup>うから</sup>のものじゃ。大夫が使う奴<sup>やつこ</sup>の一人が、この山に逃げ込んだのを、たしかに認めたものがある。隠れ場は寺内よりほかにはない。すぐにここへ出してもらおう」ついて来た大勢が、「さあ、出してもらおう、出してもらおう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、広い石畳が続いている。その石の上には、今手に手に松明を持つた、三郎が手のものが押し合つている。また石畳の両側には、境内に住んでいる限り

の僧俗が、ほとんど一人も残らず簇むらつている。これは討手の群れが門外で騒いだとき、内陣からも、庫裡くりからも、何事が起つたかと、怪しんで出て来たのである。

初め討手が門外から門をあけいと叫んだとき、あけて入れたら、乱暴をせられはすまいかと心配して、あけまいとした僧侶が多かった。それを住持曇どん猛みょう律師りつしがあけさせた。しかし今三郎が大声で、逃げた奴を出せと言うのに、本堂は戸を閉じたまま、しばらくの間ひっそりとしている。

三郎は足踏みをして、同じことを二三度繰り返した。手のものうちから「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑い声が交じる。

ようようのことで本堂の戸が静かにあいた。曇猛律師が自分であけたのである。律師は偏へん衫さん一つ身にまとい、なんの威儀をも繕つくろわず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階はしの上に立った。丈たけの高い巖がん畳じょうな体と、眉のまだ黒い廉張かどばった顔とが、揺ゆめく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師はしずかに口を開いた。騒がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで黙つたので、声は隅々まで聞えた。「逃げた下人げにんを捜しに来られたのじゃな。当山では住持のわしに言わずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは当山にいぬ。それはそれとして、夜陰

に劍戟を執つて、多人數押し寄せて参られ、三門を開けと言われた。さては国に大乱でも起つたか、公の叛逆人でも出来たかと思つて、三門をあけさせた。それになんじや。御身が家の下人の詮議か。当山は勅願の寺院で、三門には勅額をかけ、七重の塔には宸翰金字の経文が蔵めてある。ここで狼藉を働かされると、国守は検校の責めを問われるのじや。また総本山東大寺に訴えたら、都からどのような御沙汰があらうも知れぬ。そこをよう思つてみて、早う引き取られたがよからう。悪いことは言わぬ。お身たちのためじや」こつ言つて律師はしづかに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬みをした。しかし戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもはただ風に木の葉のざわつくようにささやきかわしている。

このとき大声で叫ぶものがあつた。「その逃げたというのは十二三の小わつぱじやらう。それならわしが知つておる」

三郎は驚いて声の主を見た。父の山椒大夫に見まごうような親爺で、この寺の鐘楼守である。親爺は詞を續いで言つた。「そのわつぱはな、わしが午ごろ鐘楼から見ると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわい代りには身が軽い。もう大分の道を行つたじやろ」  
「それじや。半日に童の行く道は知れたものじや。続け」と言つて三郎は取つて返した。

松明たいまつの行列が寺の門を出て、築泥ついでじの外を南へ行くのを、鐘楼守は鐘楼から見て、大声で笑った。近い木立ちの中で、ようよう落ち着いて寝ようとした鴉からすが二三羽また驚いて飛び立った。

あくる日に国分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往ったものは、安寿の入水じゆすいのことを聞いて来た。南の方へ往ったものは、三郎の率いた討手が田辺まで往って引き返したことを聞いて来た。

中二日おいて、曇猛律師が田辺の方へ向いて寺を出た。鹽たらひほどある鉄の受糧器を持って、腕の太さの錫杖しゃくじょうを衝いている。あとからは頭を剃りこくって三衣えを着た厨子王ずしおうがついて行く。

二人は真昼に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊った。山城の朱雀野しゆじやくのに来て、律師は権現堂に休んで、厨子王に別れた。「守本尊を大切にして往け。父母の消息はきつと知れる」と言い聞かせて、律師は踵くびすめぐらを旋した。亡くなった姉と同じことを言う坊様だと、厨子王は

思つた。

都に上つた厨子王は、僧形そうぎようになつていたので、東山の清水寺きよみずでらに泊つた。

籠堂こもりどうに寝て、あくる朝目がさめると、直衣のうしに烏帽子えぼしを着て指貫さしぬきをはいた老人が、

枕もとに立つていて言つた。「お前は誰の子じや。何か大切な物を持つているなら、どうぞおれに見せてくれい。おれは娘の病氣の平癒へいゆを祈るために、ゆうべここに参籠さんろうした。すると夢にお告げがあつた。左の格子こうしに寝ている童わらわがよい守本尊を持つている。それを借りて拜ませいということじや。けさ左の格子に来てみれば、お前がいる。どうぞおれに身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。おれは関白師実もろざねじや」

厨子王は言つた。「わたくしは陸奥掾正氏むつのじようまさうじというものの子でございます。父は十二年前に筑紫の安楽寺へ往つたきり、帰らぬさうでございます。母はその年に生まれたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡しのぶごおりに住むことになりました。そのうちわたくしが大ぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買いに取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ売られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つている守本尊はこの地藏様でございます」こう言つて守本尊を出して見せた。

師実は仏像を手を取つて、まず額に当てるようにして礼をした。それから面背めんぱいを打ち返し打ち返し、丁寧に見て言った。「これはかねて聞きおよんだ、尊い放光王地蔵菩薩ほうこうおうじぞうぼさつの金像こんざうじゃ。百済国くだらのくにから渡つたのを、高見王が持仏にしておいでなされた。これを持ち伝えておるからは、お前の家柄まぎに紛れはない。仙洞せんとうがまだ御位みくらいにおらせられた永保えいほの初めに、国守うの違格いきやくに連座して、筑紫へ左遷せられた平正たいらのまさうじ氏が嫡子ちやくしに相違あひだあるまい。もし還俗げんぞくの望みがあるなら、追つては受領ずりようの御沙汰ごさたもあろう。まず当分はおれの家の客にする。おれと一しよに館やかたへ来い」

関白師実の娘といったのは、仙洞にかしずいている養女で、実は妻の姪めいである。この后きこは久しい間病気でいられたのに、厨子王の守本尊を借りて拝むと、すぐに拭ぬぐうように本ほんぶ復くせられた。

師実は厨子王に還俗させて、自分で冠かんむりを加えた。同時に正氏が謫所たくしよへ、赦免状しゃめんじようを持たせて、安否を問いに使いをやつた。しかしこの使いが往つたとき、正氏はもう死んで

いた。元服して正道と名のついている厨子王は、身のやつれるほど歎いた。

その年の秋の除目に正道は丹後の国守にせられた。これは遙授の官で、任国には自分で往かずに、掾を置いて治めさせるのである。しかし国守は最初の政として、丹後一國で人の売り買いを禁じた。そこで山椒大夫もことごとく奴婢を解放して、給料を払うことにした。大夫が家では一時それを大きい損失のように思ったが、このときから農作も工匠の業も前に増して盛んになって、一族はいよいよ富み栄えた。国守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、国守の姉をいたわった小菘は故郷へ還された。安寿が亡きあとはねんごろに申われ、また入水した沼の畔には尼寺が立つことになった。

正道は任国のためにこれだけのことをしておいて、特に仮寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡った。

佐渡の国府は雑太という所にある。正道はそこへ往って、役人の手で国中を調べてもらったが、母の行くえは容易に知れなかった。

ある日正道は思案にくれながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道にかかった。空はよく晴れて日があかあかと照っている。正道は心のうちに、「どうしてお母あさまの行くえが知れないのだろう、もし役人なんぞ

に任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神仏が憎んで逢わせて下さらないのではあるまいか」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家がある。家の南側のまばらな生垣いけがきのうちが、土をたたき固めた広場になつていて、その上に一面に蓆むしろが敷いてある。蓆には刈り取つた粟あわの穂が干してある。その真ん中に、襪ぼろを着た女がすわつて、手に長い竿さおを持つて、雀の来て啄ついばむのを逐おつてゐる。女は何やら歌のような調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、この女に心が牽ひかれて、立ち止まつてのぞいた。女の乱れた髪は塵ちりまみに塗ぬれている。顔を見れば盲めしいである。正道はひどく哀れに思った。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて来た。それと同時に正道は瘡おこりやみ病びのように身うちが震ふるつて、目には涙が湧いて来た。女はこういう詞を繰り返してつぶやいてゐたのである。

安寿恋しや、ほうやれほ。

厨子王恋しや、ほうやれほ。

鳥しやうも生うあるものなれば、

疾とう疾とう逃げよ、逐おわずとも。

正道はうつとりとなつて、この詞に聞き惚れた。そのうち臟腑ぞうぷが煮え返るようになって、<sup>けもの</sup>獣めいた叫びが口から出ようとするのを、齒を食いしばつてこらえた。たちまち正道は縛られた縄が解けたように垣のうちへ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつつ、女の前に俯伏うつぶした。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏したときに、それを額に押し当てていた。

女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知った。そしていつもの詞を唱えやめて、見えぬ目でじつと前を見た。そのとき干した貝が水にほとびるように、両方の目に潤うるおいが出た。女は目があいた。

「厨子王」という叫びが女の口から出た。二人はびったり抱き合った。

大正四年一月

# 青空文庫情報

底本：「日本の文学 3 森鷗外（二）」中央公論社

1972（昭和47）年10月20日発行

入力：真先芳秋

校正：野口英司

1998年7月21日公開

2006年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 山椒大夫

## 森鷗外

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>